



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「メノン」篇における探求の端緒 : 「よく」「正しく」という副詞が描きとるもの
Author(s)	田中, 伸司; Tanaka, Shinji
Description	
Citation	哲学, 37, 19-37
Issue Date	2001-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48009
Type	departmental bulletin paper
File Information	37_19-37.pdf



『メノン』篇における探求の端緒

—「よく」「正しく」という副詞が描きとるもの—

田中伸司

ソクラテスとその対話相手との探求は、つねに問いをもつて開始される。端緒となる問いとそれへの答え、そしてさらなる問いと答えという運動が、ソクラテスの行う探求のすべてである。本稿の目的は、「よく」「正しく」という副詞を軸に『メノン』篇前半部における「探求の範型」(74b6-77b1) (1)を分析し、ソクラテスの探求の端緒を見定めることにあ
る。

一 メノンの問い — ゴルギアスの知恵 —

「はたして、徳は教えられ得るのだろうか、こういう問題にあなたは答えられますか、ソクラテス」(2) (70a1-2)。これが対話篇の冒頭を飾るメノンの問いである。しかし、この問いは探求の端緒とはなり得ない。少なくともそれはソクラテスの探求の端緒ではない。この問いは何らかの思いなしがメノンにあり、その思いなしが問いの前提となっていることを予想させるからである。実際、「徳とは何であるのか」(71d5)を「語ることは難しいことではなら」(71e1)と、メノンはその思いなしを語ってみせている。

ところで、ソクラテスはメノンの問いを導いた思いなしを、ソフィスト・ゴルギアス⁽³⁾の「知恵に魅了された」^(70b4)結果であると指摘する。

「君たちを（知恵について）そのようにした原因は、ゴルギアスだね。…とりわけ、彼が君たちに植えつけたのは、誰かが何かを問うたとき、いかにもそのことを知っている人らしく、臆せず堂々と答えるという習慣だ。」^(70b2-c1)

徳がどのようなものを問うメノンの問いはこのような問答の習慣にしたがって発せられたのであり、そこに前提されている思いなしは「かの人（ゴルギアス）のそれに他ならない」^(71d2)。つまり、メノンの問いはソクラテスのそれとは異なつた探求の端緒であるがゆえに退けられるのである⁽⁴⁾。

では、ゴルギアスの知恵とはいかなるものだろうか。「徳とは何であるのか」とソクラテスに問われ、メノンはゴルギアスから学んだように「いかにもそのことを知っている人らしく、臆せず堂々と答え」ている。ゴルギアスが「ギリシア人のうちで誰でもものぞむ者に、何でも好きなことを尋ねさせ、誰に対しても答える」^(70c1-c2)ように、メノンもまた「おのぞみとあれば」^(71e2, 5, 6)とそのまま徳を語り、「徳が何であるかを言つことで行き詰ることはない」^(72a1-c1)と胸を張る。なぜ行き詰ることはないのか。その理由を、メノンはつぎのように語る。

「それぞれの活動と年齢に応じて、それぞれの働きのために、われわれのそれぞれには徳があるからです。」^(72a2-a4)
この定式の「それぞれ」に、たとえば「男」という語を入れるならば、「男の活動とその年齢に応じて、男の働きをな

すために、男の徳がある」とといった文を得ることができる。そして、女、子供、老人などの働きとは区別される何らかの働きを提示するとき、男の徳についての答えが完成する。メノンには「友にはよくしてやり、敵には害をなす」(70c) あるいは「女は」家の中のことを守り、男に服従する」(70c) という一般に流布した言説(7)を基に、男の徳そして女の徳をつぎつぎと導く。上述の定式を世間の常識にあわせて用いることによって、メノンは「いかにもそのことを知っている人らしく」堂々と徳の何であるかを答えることができるのである。

このメノンの答えは直ちに退けられる。なぜなら、メノンが語る徳は性別や年齢などといった世間一般の分節のうえに成立しているからである。それは、たとえばさまざまな種類の蜜蜂が「蜜蜂であるということによって」(72b4-5)ではなく「何か他のことによつて、たとえば美しさや大きさ」(72b5-6) などによつて分類されるのと同じだからである。しかし、ソクラテスが問うているのは、「そのことによつてすべての蜜蜂が少しも異ならず、同じであることになる、それを何である主張するのか」(72c2-3) という問いなのである。

ところで、メノンは蜜蜂についてその「あるということ(ousia)」(cf. 72b1) を答えることができると考えている。しかし、メノンが答え得ると考えるのはソクラテスの問いを理解したからではなく、蜜蜂の「何であるか」をあらかじめ知っていると思ひなしているからである。それゆえ、ソクラテスが「徳についても同様である」(72c6) と語り出すとき、メノンの理解は停止することになる。

「ソクラテス」 たとえ多くの、さまざまな種類のものがあるとしても、少なくともある一つの、それによつてこそ徳であるということになる同じかたち(eidos)をすべての徳は有しており、答える人はこのかたちに目をむけて、まさに徳であるところのそれを問う人に明らかにするのがもっともなことだろう。ぼくの言っていることがわからな

いかね。「メノン」 わかるような気がしますが、でも、思うようには問われていることを掴めていません。」(726-d3)

メノンがしたがう世間の常識は、蜜蜂は蜜蜂であるという点ではみな同じだけれども、徳については「男には男の徳があり、女やその他のものたちにはまた別の徳がある」(725-d)と告げている。たとえソクラテスが「健康や、大きさや、強さや、そういったものについて」(726-7)「どこであれ同じかたちがあり」(728)、その「同じかたちによって」(728) そうあるのではないかと問いを重ねようともである。実際、ソクラテスがふたたび徳について問うたとき、メノンははつきりとその違いを口にする。

「ソクラテス」 徳は、徳であることという点で、子供のなかであろうと老人のなかであろうと、女のなかであろうと男のなかであろうと、何か少しでも異なっているのだろうか。「メノン」 どうも私には、ソクラテス、なんだかこの場合にはもう、これまでの他のものとは同じようではないと思えるのですが。」(721-5)

メノンはつねに自らの思いなしを基に「少なくともこの私には」と異議を唱えることができる。しかも、その思いなしが一般に流布した言説に基づいたものであるがゆえに「人々もまた同様に思っている」とさえ言い得る。メノンの思いなしは私秘的であるがゆえの特権性と、一般的な言説に則っていることによる公共性の、両者を享受するのである。

ソクラテスは問いの矛先をかえ、徳を語るメノンの言葉の吟味へとむかう。なぜなら、問いに応えて何かを語ること、その問いに呼応することにおいて既に、私秘的に思いなすことを越え出してしまっており、そこには問いと答えを織りなす

メノン自身の語りが露れ出るからである。しかし、徳の語りの吟味への転換はたんに対話を進めるための手段ではない。

二 探求の範型 ―対話論法にかなった仕方での探求―

ソクラテスはメノンの徳の語りへの吟味を、つぎのような確認をもって開始する。

「ソクラテス」 一方で男の徳は国をよく治めることであり、他方で女の徳は家をよく治めることでありと、君は語っていたのではないか。「メノン」 確かに。」(73a6-7)

男の徳と女の徳はともに「よく治めること」ではあるが、国と家という違いがある。この対象の違いが何をなすべきかということ、すなわち男の働きと女の働きの内容の差異を決定づけていることになる。それゆえ、「よく治めること」の、その「よく」についてソクラテスが問うたとき、メノンは安易に同意することになる。すなわち、「よく」とは「節制をもって正しく」(*sôphronôs kai dikaios*) (73a9) であり、「正義と節制によつて」(73b1-2) であることに、何のためらいもなく同意している。なぜなら、メノンにとつて、「よく」とは徳としての働きの様態ではないからである。

この「よく」から「節制をもって正しく」という副詞への言い換え、そして「正義と節制によつて」という与格への移行は、表現上の些細な違いのように思われるかもしれない。しかし、それらはたんなる働きの様態の描写の差異ではなく、人が「よくあること」の原因であると語られることになる。

「女も男も、もしよくあるうとするならば、どちらも同じものを必要とすることになる、すなわち正義と節制を。…したがって、人間はすべて同じ仕方によくある。なぜなら、同じものを得て、よくなるからである。」(7363-63)

「よくあること (agathoi einai)」は「あること (einai)」の様態の一つではない¹⁾。もしそれが「あること」の様態のたんなる差異として扱われるのであれば、「何であるか」の問いは「どのようであるか」の問いへと収斂することになる。なぜなら、徳の「何であるか」を問うことは「あること」の様態を問うこととなり、結局「どのようであるか」という問いとなるからである。しかし、「徳の何であるか」という問いが「徳は教えられ得るのだろうか」という問いと異なるように、二つの問いは異なっている。その異なりをいま、ソクラテスは原因性の差異として語り出しているのである²⁾。

このソクラテスによる副詞から与格へそして「よくあること」の原因へとという移行を、メノン³⁾は容認する。というのも、メノンは「よく」という副詞が描きとるものの中に、「それによってこそ徳であるということになる同じかたち」があることを認めざるを得ないからである。メノンはさまざまな徳の働きについてみな「よく」と語るからであり、そうした語りのうちには一つのかたちが現れているからである。男の徳と女の徳はその働きの対象は異なるとしても、「徳」という同じ名によって呼び慣わされており、そこには同じ一つのかたちが見出される筈だからである。では、その同じ一つのかたちとは何であるのか。メノンはつぎのように答える。

「人を支配できること以外にはないでしょう、もしあらゆる場合にわたって何か一つのをあなたが求めているのであれば。」(7369-d1)

この答えは直ちに退けられる。「人を支配できること」という働きは、子供や奴隷などには当てはまらないからである。しかし、このメノンの答えが退けられる理由は、そうした働きに共通な「何か一つのもの」を捉え損なったからではない。なぜなら、メノンが認めざるを得ない「同じかたち」は働きとして同定されるような何かではなく、働きにおいて「よく」という副詞が描きとるものうちにあるからである。それゆえ、ソクラテスはメノンの答えが不十分であることを指摘したうえで、さらにつぎのように問うのである。

「ソクラテス」 支配することができると君は主張する。そこに「正しく、不正ではなく」をつけ加えるべきではないだろうか。「メノン」 私もそうすべきだと思います。正義は、ソクラテス、徳なので。 「ソクラテス」 徳だろうか、メノン、それとも徳の一種だろうか。「(73d7-e1)

対話はこちらから「正義だけではなく、他のものも徳であると語る」(73e1-g) ことが確認され、アポリアへとむかう。すなわち、「二つの徳を求めながら、たくさんの徳を見つけてしまおう」(74a7-g) ことになる。一見すると、このアポリアはソクラテスの「徳なのだろうか、それともある種の徳なのだろうか」という問いから生じたように見える。つまり、メノンの「正義は徳なのだから」という言葉尻を捉え、そこからアポリアを導いたのだと。しかし、アポリアはメノンの答えから導かれているのである。

「正しく、不正ではなく」を付加すべきというソクラテスの提案は、メノンが言うような「正義も徳なのだから」という理由で述べられたのではない。「正しく、不正ではなく」を問うことこそが、「よく」という副詞が描きとるものを問うことだからである。メノンは「よく」という副詞によって男と女の徳を語り、徳があるためには「正義と節制」を必

要とすることに同意している。したがって、人の「よくあること」を探求するのであれば、「支配することができること」という働きの種別ではなく、「正しく、不正にはなく」という副詞の描くものこそが問われるべきなのである。

しかし、メノンには「それらすべての徳を通じてある、一つのものを見つけたことができなぬ」(749^a10)。副詞が描きとるものから目をそらし、働きの同一性のうちに徳の「何であるか」を見出そうとするからである。そしてアポリアに陥ってなお、メノンは「あらゆる徳に当てはまる一つの徳」(749^b2)を求めている。探求は同じ所をめべり、「前進する」(749^b3)ことはない。そこで、ソクラテスは「形 (skhema) とは何であるか」(749^b5)の問いを例にとり、「徳について答えるための練習」(758^a9)を行おうとするのである。

「それら多くのものをある一つの名によって呼び……どれ一つとして形でないものはないと君は主張しているのだから、直線形と同様に円形を含んでいるものとは一体何であるのか。それを君は形と名づけ、円形を直線形に少しも劣らず形であると主張しているのだが。」(749^b5-6)

ソクラテスは直線形や円形「それらすべてについて同一のものを求めている」(758^a9)。しかし、それらに共通する性質を問うているのではない。「円形は真つ直ぐであるのと同様に円く、直線形は円いのと同様に真つ直ぐである」(749^b4)のわけではないからである。「よく」という副詞によって描きとられていく「ある一つの同じかたち (eidos)」が働きや対象の同一性によって同定されなかつたように、形 (skhema) も「真つ直ぐ」とか「円い」という、図形における質料的な分節によっては掴まれ得ないのである。

メノンの求めに応じて、ソクラテスはそれが「探求の範型」となることを意識しつつ、形について答えを提示する。

「存在するものの中で、そのみがつねに色に随伴しているところのもの」(75b10-11)

メノンはさらに「もし誰かが色を知らないと主張したら、そして形についてと同様に疑問をもっているとしたら」(75c5-6)と問う。「知者で、討論に長け、論争を好む人々」(75c8-9)を相手とする対話であるならば、「ほくの言うことはこれだけだ」(75d1)とメノンを突き放せばよい。なぜなら、そのような対話は、問う人と答える人のどちらの「語り(logos)」(75d2)が勝を収めるかを明らかにすることが目的だからである。その語りは問う人と答える人の生を導いている原則そのものであり、対話は両者の生のあり方を賭けての「論駁」(75d3)となるからである⁽¹⁰⁾。他方、メノンとの対話はそのような生を賭けての対話ではない。メノンはゴルギアスの「知恵に魅了されて」(70b4)、「わがままに甘やかされている人たちがするように」(70b7-8)問いを発し、「その議論がよくできていると思われる」(81a1)なら、「論争家ごみの議論」(80e2)であろうと平然と口にするからである。そのようなメノンを相手とする対話であるために、ソクラテスは探求のあり方を噛んで含めるように示すことになる。すなわち「より対話論法にかなった仕方(dialektikoteron)」(75d4)である。「より対話論法にかなった仕方」とは、たんに真実を答えるだけでなく、問う人が知っていると同様にして事柄を使って答える⁽¹¹⁾」(75d5-7)ことである。ソクラテスはメノンの同意を得た事柄を用いて、あらためてつぎのように答える。

「すべての形を通じて、立体がそこで限られるところのもの」(76a5-6)

メノンは納得した様子もなく、つづけて色について問う。ソクラテスは「ゴルギアス流に答えよう」(767c)と言う、しかも「エンペドクレスにしたがって」(767d)である。

「以上のことから、ピンドロスの文句であるが、「わが言の葉の意味をさとれ。」すなわち、色とは、視覚に適合して感覚される、形からの流出物である。」(76d3-5)

この答えをメノンは手放しで褒めたたえる。しかし、ソクラテスの評価は全く異なる。この色についての答えよりも「さっきの答えの方が優れている」(76e)と言う。「ゴルギアス流の答え」であるからには、当然のことであろう。しかし、答えとして誤っているわけではない。しかも、メノンにとっては「慣れ親しんだ語り方」(76d)でもある。男や女の徳についての答えが世間一般の言説に基づいていたように、色についての答えもエンペドクレスの説に基づいて成立している。メノンは「定式」を基にさまざまな徳へと話を広げることができるように、「この答えを基にして、音とは何か、さらに臭いやその他これらに類する多くのものを言うことができる」(76d-e)のである。では、色についての答えは形についての答えと比べて何が劣っているであろうか。

形についての答えは、「多くのものがある一つの名によつて呼ぶ」ことにおける問いへの答えであった。メノンとソクラテスは何かを「形」と呼び、「形とは何であるか」を知っていると思つてゐる。それゆえ、問いは「何を形と名指すのか」ではなく、「形とは何であるか」という根拠へとむかう。すなわち、問いはあるものが形であることの原因性を求めており、それゆえ答えは「幾何学における」(76a2)ような語りとなるのである⁽¹²⁾。他方、「ゴルギアス流の答え」は(問いを発した際の想定として)色という名指しが成立していないところでの、「色とは何であるか」の問いにむけられたも

のである。その限りでは、それは「何を色と呼ぶのか」という問いと重なり合うことになる。しかも、あるものが色とされることについて、さらなる問いと答えが交わされることはない。探求は根拠へと溯ることはなく、停止している。なぜなら、色についての答えは、対話論法にかなった仕方での問答を通じて、問う人であるメノンに納得させるものだからである。したがって、「ゴルギアス流の答え」は「範型」ではあるけれど、探求の深さにおいて劣っているのである⁽¹³⁾。しかし、これらの範型の理解において、ソクラテスとメノンの間には大きな溝がある。

三 範型の意味 ― 生のあり方を描きとるもの ―

ソクラテスはメノンにあらためてつぎのように問う。

「ソクラテス」 全体として無きずのままのこしたうえで、徳とは何であるかを言ってくれ。その範型 (ta paradeigmata) は、ぼくから得てしまっているはずだ。「メノン」 それでは、ソクラテス、私には、徳とはあの詩人が語るように、「美しきものを喜びて力あり」ということであると思われれます。そこで私もそれを徳であると言います、すなわち、美しいものを欲求して獲得する能力のあることだと。」(79b5)

ソクラテスが高名な詩人ピンドロスの言葉をひき、そしてエンペドクレスの説にしたがって色についての答えを導いたように、メノンも詩人⁽¹⁴⁾の言葉を引用し、それに基ついて答えている。ソクラテスとの対話をはじめに当たって、メノンが抱いていた思いなが「かの人 (ゴルギアス) のそれに他ならない」(71b)のものであったように、ここでは「あ

の詩人が語る」ことを「私も (E. ego)」語るのである。なぜなら、色についての答えにおいて、「慣れ親しんだ語り方」が許容されたように思えるからである。

しかし、メノンの答えは以前の答え方とは変わったようにも見える。「人々を支配できること」といった不定詞句のみ
の答えとは違い、「獲得する能力のあること (dunaton einai porizesthai)」という不定詞句には「美しいものを欲求して (epithumounta)」という分詞句がついているからである。事実、ソクラテスの吟味はこの分詞句へとむけられる。

「美しいものを欲求して」とは善きものを欲求することである」(776b-7)という同意を得たうえで、ソクラテスは「人は誰でも善きものを欲求するとは思わないか」(771c1-2)と問う。メノンは同意しない。なぜなら、現実に悪しきものを欲求する人々がいるからであり、また、もしすべての人が善いものを欲求するのであれば、上述の分詞句は徳とは関わりのない人にも当てはまることになり、不都合が生じると思われる¹⁵⁾からである。対話はこちらから「ある人々は悪しきものを欲求する」(771c)というメノンの思いなしの吟味へとむかう。その吟味は、「誰も悪しきものをのぞむことはない」(78a6)というパラドクスを介して、遂行されることになる。まず、メノンの思いなしがつぎのように分析される。

(I) 悪しきものを欲求する際に人々は、

A 「その悪しきものを善きものであると思ひこんでいる」(77c3)。

B 「悪しきものと知りながら、なおそれらを欲求する」(77c4-5)。

(II) その悪しきものを自分のものにしてしようと欲求するのは、

a 「悪しきものが誰のものになるにしても、その当人を益すると考えて」(77d1-2) のことである。

b 「悪しきものが誰のところにあつても、その者を害すると知つてらつて」(77d2-3) のことである。

ここから得られる四つの可能性(A・a、A・b、B・a、B・b)のうち、二つ(A・aとA・b)は問題とされない。そ

れらは欲求の対象を善きものであると考えてのことだからである。また、B・aという、欲求の対象が「悪しきものではないが有益」という可能性も簡単に退けられる。なぜなら、B・aであるような人々は「善きものである」と思つて欲求していたものが、実際には悪しきものであったというだけのこと」(77e10)と、メノン同意してしまふからである。しかし、それはメノンのような対話相手にとつては仕方のないことでもある。なぜなら、B・aという可能性を強く主張することは、「善きものは有益、悪しきものは有害」という世間一般の掲げる建前に対して異議を申し立てることになるからである。そのような異議を申立てるところか、メノンは対話篇冒頭で披露した答えでは世間一般の常識を用いていたほどである。「悪しきものにはあるが有益である」という、思つてはいても口にするのをはばかるような言論を吟味の対象とするためには、そうした言論を支え得ると真剣に思つている対話相手であることが必要なのである(16)。

残る可能性はB・bのみである。ある人々は悪しきものを悪しきものであると知りながら、かつ悪しきものが誰のものになつてもその当人を害すると考えながら、悪しきものを欲求する、という可能性である。B・bに対する議論はつぎのように進む。

- ① B・bである人は、自分がその悪しきものによつて害されるということを知つてゐる。(77e5-78a1)
 - ② 害を受ける人のことを、害を受けている限りでみじめであると、B・bである人は思う。(78a1-3)
 - ③ みじめな人々は不幸である。(78a3-4)
 - ④ みじめで不幸であることをのぞむ人はいない。(78a4-5)
 - ⑤ 誰も悪しきものをのぞむことはない。(78a6)
 - ⑥ なぜなら、みじめであるとは、悪しきものを欲求して所有すること以外の何ものでもないからである。(78a7-b2)
- 研究者たちが指摘するように(17)、⑤を導く過程には不備がある。すなわち、①と②から帰結するのは(r)「B・bで

ある人は、自分が欲求した悪しきものにより害を受けている限りで、自分のことを「みじめであると思う」であり、端的に(β)「B・bである人は自分のことを「みじめであると思う」ではないからである⁽¹⁸⁾。(β)は⑥を含んでおり、そこから③と④により⑤と結論される⁽¹⁹⁾。しかし、(α)から⑥を導くことはできない。なぜなら、(α)において自分のことを「みじめで不幸だと思うことがあるのは、自分が欲求した悪しきものによつて害を受けている限りだからである。したがつて、①—②という議論の流れと、③—④という議論の流れは結びつくことはなく、⑤は帰結しない。それゆえ、メノンには(α)と(β)の違いを口にさえすればB・bの可能性は否定されず、論駁されなかつた筈である⁽²⁰⁾。では、なぜメノンはその違いを指摘しなかつたのであろうか。

(α)と(β)の違いを指摘することだけで済むのであれば、それはたやすい。「害を受けているかぎりで」という限定の有無を口にすればよいからである。しかし、問題はそのような違いではなく、(α)と(β)が人のあるということにおいてどのような異なりを生ぜしめるのかを語ることにある。その異なりは、たとえば「過度の飲酒」や「肝機能障害を患うこと」といつた行為や状況の記述によつて語り得るものではない⁽²¹⁾。そうしたことどもがともに悪しきものであり、しかも前者から後者が生じると知りながら、後者を欲求しているわけではないという理由で「自分のことを「みじめである」とは思わず、前者を欲求し続ける。そのように織りなされていく生のかたちに目をむけて語られる筈のものである。なぜなら、徳とは人のあり方として語られるものだからである。

しかし、(α)と(β)の違いを人のあり方における異なりとして語ることは、メノンの手にあまる⁽²²⁾。なぜなら、人のあり方を語ることは、メノンの答えの基にある詩人の言葉の先にあることだからである。したがつて、メノンが語つた「美しいものを欲求して」という分詞句の吟味には、不備はない。議論の不備と見えるところ、すなわち(α)と(β)の違いを人のあり方に即して語ることができないところにこそ、対話相手であるメノンの孕む問題がひそんでいるからであ

る。そして、①―⑥の議論を通じてメノンの孕む歪みは一步明るみへと近づいていく。

「メノン」 あなたは真実を語っているのでしょうか、ソクラテス。そして、誰も悪しきものをのぞまない (Boulesthai) のでしょう。「ソクラテス」 そうすると、君はぎつき、徳とは善きものをのぞんで (獲得する) 能力があること

(Boulesthai te ... kai dunasthai) と語っていたことになる。²³⁾」 (78a8-b4)

「美しいものを欲求して」という分詞句が「善きものをのぞむこと」という不定詞句へと変換され、メノンの答えは「喜びて力あり (chainein te ... kai dunasthai)」(77b3) という詩人の言葉と同様のものとなったことになる。ソクラテスはいま、メノン自身の思いなし(と見えた)部分がすべて剥がれ落ち、その基にある詩人の言葉が露呈したと告げている。すなわち、メノンの答えはその答え方の点で、「人々を支配できること」(73c9)といった不定詞句のみの答えと何ら変わらなくなつたという確認を求めているのである。

しかし、メノンはこのソクラテスによる確認の意義を気づいていない。あたかも最初から「善きものをのぞんで能力があること」と語っていたかのように応じている(78b4)。メノンには、分詞句であろうが、不定詞句であろうが、そこには何の違いも無いと思えているのである。このメノンとソクラテスのすれ違いは、「語られたことのうち「のぞむこと」はすべての人にそなわる」(78b5) ことからメノンの答えがさらに絞り込まれるときに、一層はつきりする。

「ソクラテス」 したがって、どうか、徳とは君の説によること (kata ton son logon)、善きものを獲得する能力と
いうことになる。「メノン」 私も、ソクラテス、まったくいまあなたが解釈された通りだと思います。」(78b9-c2)

「君の説によると」というソクラテスの言葉にもかかわらず、メノン自身が提出した答えを自分自身の思いなしとは見なししていない。それどころか、自分が引用した詩人の言葉について、メノンはいまソクラテスによる「解釈」を拝聴しているところであると思っている。それは、メノンが「探求の範型」を「ゴルギアス流の答え」という「慣れ親しんだ語り方」によって理解しているからに他ならない。ソクラテスによる色についての答えがピンダロスやエンペドクレスの詩に基づき重々しく語られていたように、メノンの答えも詩人の言葉に基づいていた。対話篇の冒頭ではゴルギアスの「知恵」にしたがって問いを発し、今度はソクラテスの「探求の範型」を雛形として答えようとしたのである。しかも、ゴルギアスからその知恵を教授されたように⁽²⁴⁾、いままたソクラテスから詩人の言葉の「解釈」を通じて新たな知恵を受け取るうとしていると思っている⁽²⁵⁾。メノンには知を誰かから教授してもらう「習慣」^(82b)が染みついているのである⁽²⁶⁾。

しかし、知恵を誰かから教授されるといった「習慣」から抜けきらない限り、メノンは探求の端緒のあたりをぐるぐるまわり、何度でも「同じ目にあつ」^(74b7)ことになる。すなわち、徳のあることを、ひとがよくあることの原因を「善きものを獲得する能力」^(80c)といった働きの同一性のうちに求めるのであれば、ふたたびそこに「正しく」という副詞の描きとるものが問われることになる。

「ところで君は、メノン、その「獲得」に「正しくかつ敬虔に」とつけ加えるつもりはないだろうか。」^(78d3-4)

メノンは同意する他はない。なぜなら、不正に善きものを獲得することは、メノンにとって「悪徳」^(78d)だからである⁽²⁷⁾。したがって、「人々を支配できること」という答えのときと同様に、「その「獲得」には、正義や節制や敬虔や

あるいは徳の他の何らかの部分がつけ加わらなくてはならない」(8d7e1) ことになる。しかし、「徳が全体として何であるかがまだ探求されているのに、その部分を使って答えること」(79d6f) は対話論法になつておらず、メノンの答えは退けられる。「親愛なるメノン、君はもう一度端緒から (ek'arches)、徳とは何であるかという同じ問いを受ける必要がある」(79c34) と。

結び

「よく」「正しく」という副詞が描きとるものとは、生のあり方そのものである。刻々と変化し、流れていくかに見える生のあり様から、副詞は一つのかたちを描きとろうとする。それは一つ一つの行為ごとに異なりながら、それらの行為すべての中にいて見るとられる同じ一つのかたちであることによつて、それは個々の行為を超え、われわれの生き方を定め、そしてあるということの原因となる。しかし、いまはまだ、副詞の描きとるものの内実は明らかにはなつていない。そうした暗さを抱えながらソクラテスに出会うとき、それはさらなる問いと答えという動きの端緒となる。

しかし、周知のように、メノンは「端緒から徳とは何であるかという同じ問いを受ける」ことはない。それどころか、「探求—学習のアポリア」(28)を提出することになる。「よく」「正しく」という副詞によつて描きとられていく「そのかたち」を目をむけて、まさに徳であるところのそれを問う人に明らかに」(72c8d1) しない限り、探求を「前進」(74b3)させることはできないからである。

- (1) 引用・参照は『メノン』篇からである。テキストは基本的には Burret 校訂の OCT を用いた。
- (2) 岩波プラトン全集の藤沢令夫訳を、論述の都合により一部改変して、使用させていただいた。
- (3) ただし、ゴルギアスは徳の教師とはされていない (95b6-c6, cf. 91b3-5)。
- (4) 田中享英「何であるか」の知『メノン』と『分析論後書』(『北海道大学 文学部紀要』48ノ1:通巻98号, 1999) 9 参照。pace F.J. González, *Dialectic and Dialogue: Plato's Practice of Philosophical Inquiry*. (Northwestern U. P., 1998) 156-65.
- (5) Cf. Aristotle, *Politica*, 1260a20-28, R.S. Bluck, *Plato's Meno*. (Cambridge U. P., 1961), 201, 217-8.
- (6) メノンは個人的な体験を思いなしにしようと答えようとはしていない。とどうのも、メノンはゴルギアスに由来する「知恵」を試したからである。 Cf. González, *op. cit.* 154.
- (7) Cf. *Crito*, 48b3-9.
- (8) pace González, *op. cit.* 158-60.
- (9) pace Bluck, *op. cit.* 211, 243, 249, González, *op. cit.* 161-5.
- (10) 田中伸司「ソクラテスの対話による論駁法と生き方の原理―『ゴルギアス』474c-475c―」(北海道大学哲学会編『哲学』23号, 1987) 41-57 参照。
- (11) Bluck, *op. cit.* 245-8.
- (12) Cf. W.K.C. Guthrie, *History of Greek Philosophy IV* (Cambridge U. P., 1975), 248-9, G. Vlastos, *Socrates, Ironist and Moral Philosopher*. (Cornell U. P., 1991), 120-22.
- (13) 問う人メノンの、問答への関わりりの浅さゆえとも言える。
- (14) シモニテスと目されている (e.g. Bluck, *op. cit.* 256)。後に徳の教師の候補として検討される。ソフィスト(ゴルギアス流の答えである)・立派な市民(メノン) cf. 78d2-3) そして詩人(シモニテスの言葉)とどう三者がすべて顔を出していることになる。
- (15) Cf. Bluck, *op. cit.* 259, G. Nakhnikian, 'The first Socratic paradox', in *Plato's Meno in focus*. (J.M. Day(ed.), Routledge, 1994, 129-51, reprinted from *Journal of the History of Philosophy*, 11, 1973, 1-17), 131.
- (16) たとえば『ゴルギアス』篇のポロスやカリクレスのような。田中伸司前掲論文 41-57 および「言論と生との関わり―ソクラテス対カリクレス―」(日本哲学会編『哲学』No.45, 1995) 183-92 参照。pace Guthrie, *op. cit.* 246-7.

- (17) Nakhtnikan, *op.cit.* 133-4, T.Irwin, *Plato's Moral Theory: The Early and Middle Dialogues*. (Oxford U. P., 1977), 300n.51.
- (18) *pace* G.X.Santas, *Socrates: Philosophy in Plato's Early Dialogues*, (Routledge & Kegan Paul, 1979), 186.
- (19) Cf. Nakhtnikan, *op.cit.* 134.
- (20) Cf. Nakhtnikan, *op.cit.* 135, Irwin, *op.cit.* 300n.51, Santas, *op.cit.* 315-6n.16.
- (21) *pace* Santas, *op.cit.* 187-9.
- (22) (α) と (β) の違いをことなげに強調することが B、Γ である人の弁護のように、しかも自らもそうした人々の一員であることを示唆するかのやうに思えてしまふことか、その一因であるう。
- (23) 藤沢訳をはじめとする一般的な翻訳と異なり、本稿では①—⑥の議論の帰結としてこの一文を読み解ぐことを意図している。
- (24) 71c5-d3, cf. 73c7-8, 96d5-7.
- (25) 探求の範型にいつてメノンには「もしいまのようなたくさん私に語ってくださるのなら、ここにとどまらせていただきましよう」(77a1-2)と喜ぶが、ソクラテスは「いまのようなたくさん語りたぐさん語ることにはできないのではないか」(77a4-5)と否定的であった。この時点で既に、メノンはソクラテスから知恵を教授されていると思つてゐるのである。
- (26) 81e5-82a6.
- (27) 由緒正しい有力市民 (70b4-5, 78d2-3) としては当然のことである。
- (28) 80d5-8, cf. 80e2-5.